

山口市における嗜好色と着用色の調査

星野裕之・西川優美*・吉川景子*

Survey on Color Preference and Wearing Color in Yamaguchi – City in Autumn

Hiroshi Hoshino, Yumi Nishikawa and Keiko Yoshikawa

(Received October 1, 2004)

1. はじめに

私たちは、普段の生活の中で色彩に関する情報を無意識のうちに取り入れている。一瞬のうちに視界に入る色彩だけでも多々ある。それらは単なる色のついた物ではなく、何らかの意味を持つ。それが色のもつイメージによるものであったり、個人の好き嫌いによるものであるかもしれない。色彩と一言で表しても、そこにはいろいろな要素が含まれる。

衣服を中心としてファッションに関して言えば、たとえば、「今シーズンは〇色系がはやりそう」と情報が流れた途端、街角の女子高生からテレビタレントまでその色一辺倒の服装になったりする。毎年季節ごとに変わる流行色はどのように生まれるのであろうか。実は、実シーズンの2年前に国際流行色協会（パリ）が発信基地となり、2年後に流行りそうな色のあるコンセプトをもって選定し、この情報をもとに日本流行色協会（JAFCA）が日本人向けにアレンジを加え、ファッション産業へ発信している。近年ではJAFCAだけではなく、エキスポフィル、プルミエールジョンその他の展示会で素材にアレンジされてファッション産業へ展開されたり、いわゆるトレンド情報会社（トレンドユニオン、ペクレール、ネリーロディ等）も独自に情報を提供したりすることによって、最終的に実シーズンの半年前にテレビ、雑誌などのメディアを通じて、流行色を発表するシステムになっている。しかしながら、発表色どおりに流行るかどうかは別の話である。

色彩に関連する研究の多くは、東京、大阪、福岡などの大都市を中心に論じられている。地方の時代と言われてから久しいが、ファッションに関しても必ずしも大都市から地方へ流れるだけではなく、地方から大都市へ発信してもよいように思う。

本研究では、山口という一地方をターゲットとし、まず、そこに在住の人々の嗜好色と着用色のデータを集めることから始めることとする。その中からいくつかの特徴を見出したい。また、メディア等を通じて発信される流行色が人々の嗜好色や着用色にどの程度影響するののかも調べてみようと思う。ここで、当時の秋冬に発表された流行色をJAFCAから引用¹⁾すると、18色発表され、そのうち注目されたのは黒色と、そのアクセントカラーである赤色であった。

2. 調査方法

本研究では、アンケートによる意識調査と被験者が着用している服の色を調査した。以下にその方法について述べる。

*山口大学教育学部卒業生

2. 1. アンケート調査用紙

アンケート調査法により山口在住の人たちのデータを集めるため、図1のアンケート用紙を作成した。各項目別の目的は次のとおりである。

1. 好きな色は何色系ですか？

この項目では人々の嗜好色を理解しやすい10色系統に分け、調査するためのものである。年代別、職業別で差が出てくるのか、また質問4の持っている服の色との関連性や質問2の流行色による影響などを分析するための項目である。

2. 今年の秋冬の流行色をご存知ですか？

この項目では、人々の流行色への関心の度合いを調査し、年代別、職業別に区分して分析していくためのものである。また、質問1の好きな色への影響や質問4の持っている服への影響を調べるための項目である。

3. 上の問いに「はい」と答えた人にお聞きします。どのようにして流行色を知りましたか？

この項目では、どのようにして情報を得たのか、またそのことから考えられる年代別、職業別における相違を明らかにするための項目である。

4. 秋冬の服でお持ちの服は何色系が多いですか？

この項目では、年代別、職業別の差が出てくるのか、また質問1の好きな色との関連性や質問2の流行色による影響などを分析するための項目である。

5. 現在のお住まいはどちらですか？

ここでは、山口県在住の人のみ限定し、調査するための選別項目である。山口市内と山口市を除く山口県内の2地域を対象とする。

6. あなたの年齢をお教えてください。

ここでは、10歳代（高校生以上の18歳前後）から60歳代までの女性を対象とするため、分析上の情報としての項目となる。20代から50代までは5年ごとに区切ったのは、流行色というものが、その性質上流行り廃りのサイクルが短いために年代区分も短くした。

7. あなたのご職業をお教えてください。

ここでは、学生、職業人（自営業、公務員、会社員、病院関係者などを含む）、専業主婦、フリーター（パート）に区分し、分析するための情報となる項目である。

以上が、各項目に対する目的であるが、アンケート調査を実施するにあたり、被験者に不快感を与えないよう十分配慮した。

2. 2. 着用色調査用紙

アンケートを行っている最中に、被験者が着用している物の色を、上衣、インナー、スカー

山口市における嗜好色と着用色の調査

〈色彩アンケート〉

□

アンケート調査へのご協力のお願い

この調査は婦人服に使われている色彩を調査することにより、流行色の取り入れ方の世代間の相違を明らかにすることを主な目的としています。

調査結果は統計的に処理しますので決して個人のデータを公表したりすることはありません。どうぞ宜しくご協力のほどお願い申し上げます。

当てはまる項目番号を1つ○で囲んでください。

1、好きな色は何色系ですか？

(1) 赤色系 (2) オレンジ色系 (3) 黄色系 (4) 緑色系 (5) 青色系 (6) 紫色系
(7) 茶色系 (8) 白色 (9) 黒色 (10) 灰色

2、今年の秋冬の流行色をご存知ですか？

(1) はい (2) いいえ

3、上の問いに「はい」と答えた人にお聞きします。どのようにして流行色を知りましたか？

(1) テレビを見て (2) 雑誌を読んで(雑誌名:) (3) 人に聞いて
(4) お店に行つて (5) その他 ()

4、秋冬の服でお持ちの服は何色系が多いですか？

(1) 赤色系 (2) オレンジ色系 (3) 黄色系 (4) 緑色系 (5) 青色系 (6) 紫色系
(7) 茶色系 (8) 白色 (9) 黒色 (10) 灰色

5、現在のお住まいはどちらですか？

(1) 山口市内 (2) 山口県内(山口市を除く) (3) 山口県外

6、あなたの年齢をお教えてください。

(1) 10歳代 (2) 20～24歳代 (3) 25～29歳代 (4) 30～34歳代 (5) 35～39歳代
(6) 40～44歳代 (7) 45～49歳代 (8) 50～54歳代 (9) 55～59歳代 (10) 60歳代
(11) 70歳代 (12) 80歳代以上

7、あなたのご職業をお教えてください。

(1) 中学生 (2) 高校生 (3) 大学生 (4) 公務員 (5) 会社員 (6) 自営業
(7) 専業主婦 (8) フリーター (9) その他 ()

アンケートにご協力ありがとうございました。

婦人服に使われている色をより正確に調査するため、写真撮影を行っています。
もしよろしければ、写真撮影もあわせてご協力お願いいたします。

図1 アンケート用紙

ト・パンツ(以下、下衣と記す)、靴下、靴、バッグ、小物の計7アイテム別に記録した(図2)。この時、色見本カード(標準色カード230、日本色研)と照合してマンセル記号で記録することとした。また、柄物の場合、そのアイテム内で面積の多い色を、そのアイテムの色として記録した。

上衣	()	[]	を主とする	[]	の
インナー	()			チェック	
スカート・パンツ	()			ボーダー	
靴下	()			水玉	
靴	()			迷彩	
バッグ	()			アニマル	
小物	()			その他	

図2 着用色調査用紙

この着用色調査は、アンケート調査における好きな色や持っている服の色、また流行色などとの比較に使用するものである。これらの結果は、アイテム別、年代別、職業別に分析するとともに、店や雑誌が提示する提案色やJAFCAの発表色との関連も交えて、調査していくためのものである。

2. 3. 調査

今回の秋冬ファッションに関する調査を行う上で、①アンケート調査、②着用色調査、③店の売れ筋調査、という大きな3つの柱を土台とし、調査を行った。

まずアンケート調査は、調査員2人一組で、2001年10月中旬から下旬にかけて、本学吉田キャンパスおよび総合小売チェーンY店において、女性を対象に、ランダムに行った。

被験者がアンケートに回答している間に、色見本カードと照らし合わせながら、着用色調査用紙に被験者の着用服のチェックを行った。アンケート終了後、ご本人の了解がある場合のみ、写真撮影を行い、より正確な情報が得られるよう努めた。

また、店の提示する提案色や実際の売れ筋などを福岡県北九州市小倉北区、山口県防府市、山口市の3地域で調査し、アンケート調査、着用色などと比較できる対象とした。方法としては、店の店員に、ブランドカラーと実際によく出る色、または形などを尋ね、許可が取れた場合は、そのアイテムを写真に撮らせてもらい、より理解しやすい形で情報を得た。同時に、雑誌に取りあげられている提案色や、話題の秋冬ファッションをまとめた。それらのデータをアンケート結果や着用色と比較し、さらに流行色との関連性についての考察も行った。

3. 結果と考察

3. 1. 被験者の概要

このアンケート調査は、本学および総合小売チェーンY店にて10月中旬から下旬にかけて行い、10歳代から60歳代の女性616名に回答してもらった。このうち山口市を除いた県内および県外、さらに70歳以上の人数が少なかったため、分析から除外し、568名について分析を行った。その年代別、職業別内訳は表1のとおりである。なお、以下の結果と考察は主に年代別に見ていくことにする。

表1 被験者の構成

	学 生	職業人	専業主婦	フリーター	総 計
10 歳 代	54		1	2	57
20歳前半	90	23	6	8	127
20歳後半	2	23	21	7	53
30歳前半		12	30	3	45
30歳後半		9	30	6	45
40歳前半		11	23	10	44
40歳後半		16	37	10	63
50歳前半	1	21	37	12	71
50歳後半		7	24	4	35
60 歳 代		3	23	2	28
総 計	147	125	232	64	568

3. 2. 好きな色と持っている服の色

図3は年代ごとに好きな色（嗜好色）を%で示したものである。全体（最下段）でみると青色系が最も好まれており、近江らが大都市圏で行った4年に渡る4回の調査²⁻⁵⁾と同様であった。次いで赤色系、橙色系、茶色系の順に暖色系が好まれる結果となった。この結果は調査時期が10月に行われたことが多少なりとも影響しているように思われる。年代ごとにみると、10代、20代では青色系、橙系色、赤色系が最も好まれ、年代が増すにつれ、それぞれの嗜好率は上がり下がりしながらも徐々に減少している。一方、年代が増すにつれ、上記3色ほどではないが、徐々に黒色、茶色の嗜好率が高くなっている。

各年代別に嗜好率の高い上位3色を示すと表2のとおりである。

この表からどの年代も上位3位までに青色系が入っている。青色は年代には関係なく好まれる色である。

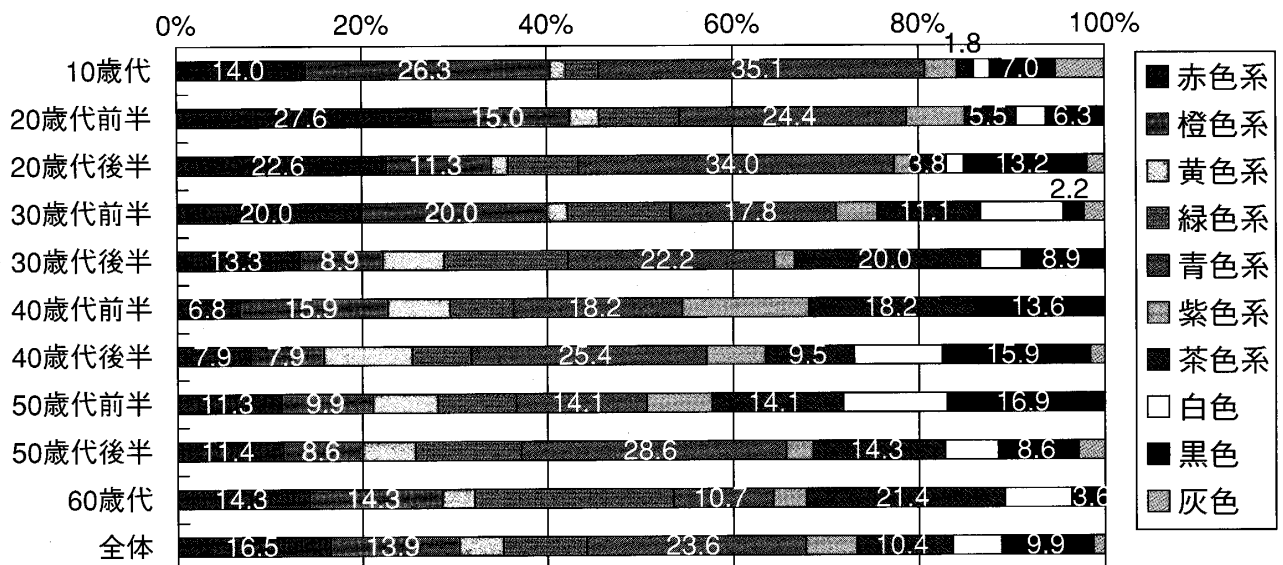


図3 年代別嗜好色

表2 年代別嗜好色および所有衣服色

年代	好きな色			持っている服の色		
	1位	2位	3位	1位	2位	3位
10歳代	青	橙	赤	茶色	黒	
20歳代前半	赤	青	橙	黒	茶色	
20歳代後半	青	赤		茶色	黒	
30歳代前半	赤・橙		青	茶色	黒	
30歳代後半	青	茶色	赤・緑	茶色	黒	
40歳代前半	青・茶色		橙	茶色	黒	
40歳代後半	青	黒		茶色	黒	
50歳代前半	黒	青・茶色		茶色	黒	
50歳代後半	青	茶色		茶色	黒	
60歳代	緑	茶色		茶色	黒	

10代～30代後半までは上位3位までに赤色系が入っているが40代から姿を消し、一方、30代後半以降から茶色系または黒色が登場することが興味적이다。これは、30歳代後半からは、色に対する社会的規範により自分の年代に見合った色を意識するようになり、秋冬の定番色でもある地味な色を好むようになったのではないかと考えられる。

図4は秋冬の服で何色系が多いかを年代ごとに%で表したものである。秋冬と限定したために、秋冬の定番色である茶色系と黒色が圧倒的に集中した結果となった(表2も参照)。ここで、黒色は従来から喪服や正装服といったフォーマルなイメージがあり、ファッション色としては不向きとされていた。しかしながら、1980年代に黒色を基調として全身無彩色で装うモノトーンがほぼ10年に渡り流行したこともあり、現在では秋冬の定番色として受け入れられている。当時の秋冬の流行色として赤色も取り上げられていたが、この結果を見る限りでは、20代後半および30代前半において13%前後占める程度であった。

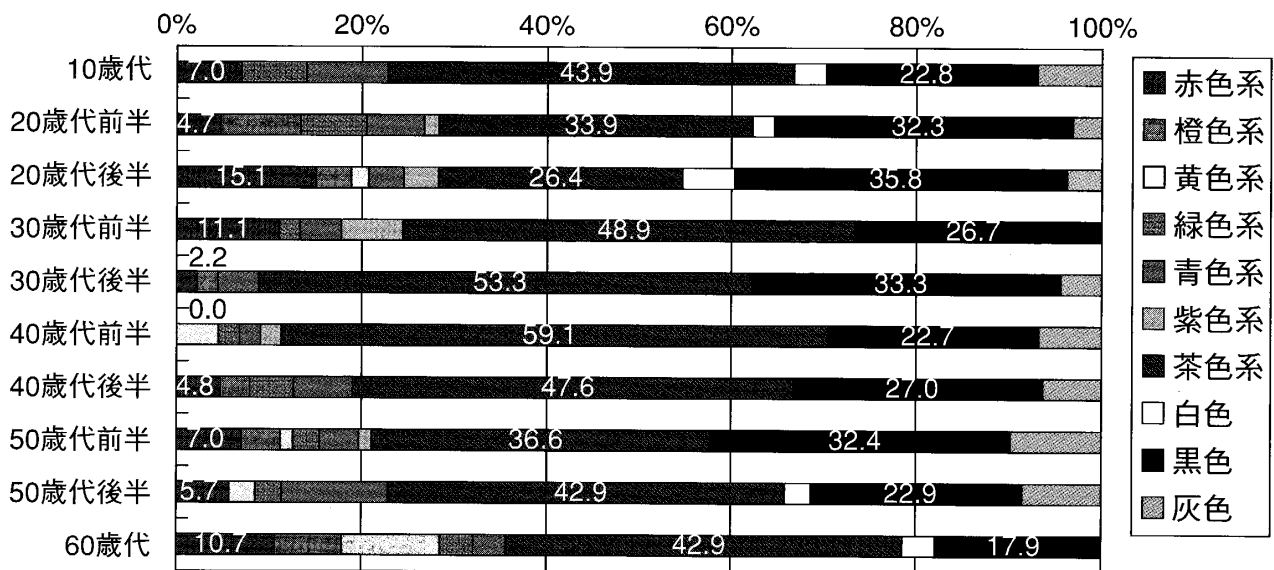


図4 年代別の持っている服の色

3. 3. 着用色

アンケート調査と同時進行に、実際に被験者が身に付けている色を上衣、インナー、下衣、靴下、靴、バッグ、小物の7アイテムごとに記録した。このうち、小物については、身に付けている人が568人中55人と少なかったため、分析から除外した。なお、調査場所が大学内および郊外型小売店舗であるため、着用服は普段着が多かった。

図5はアイテムごとの着用色を%で表したものである。また、表3に各アイテムごとに上位3位までの着用色を示した。以下にその詳細を述べる。

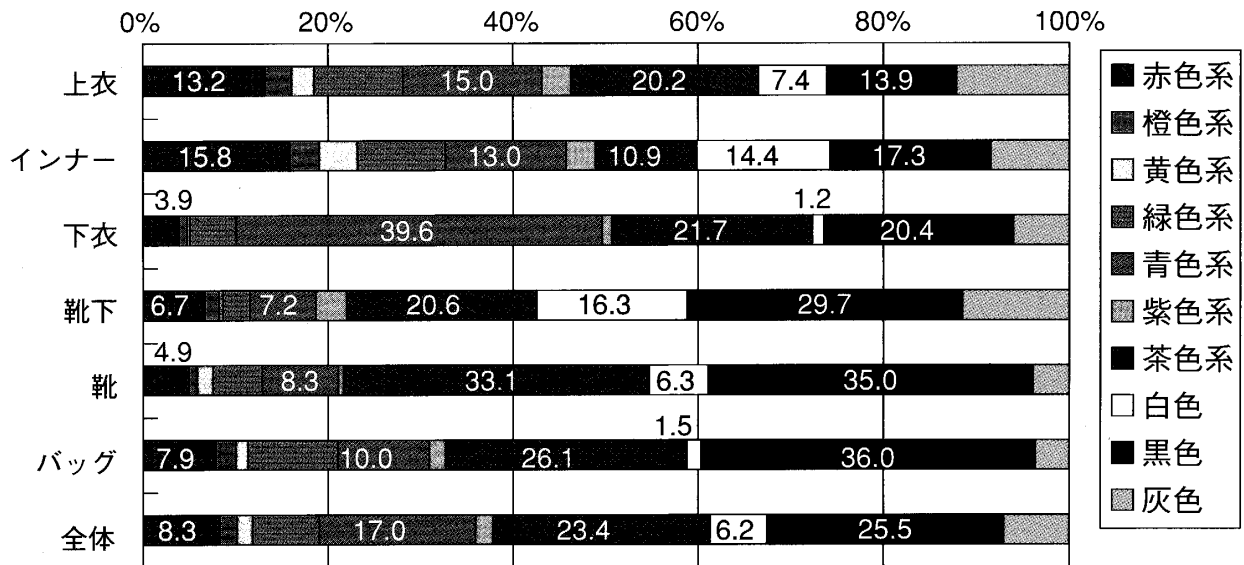


図5 アイテム別着用色

表3 アイテム別着用色上位3色

	1 位	2 位	3 位
上 衣	茶色系 (115人：20.2%)	青色系 (85人：15.0%)	黒 色 (79人：13.9%)
インナー	黒 色 (49人：17.3%)	赤色系 (45人：15.9%)	白 色 (40人：14.1%)
下 衣	青色系 (225人：39.6%)	茶色系 (124人：21.8%)	黒 色 (116人：20.4%)
靴 下	黒 色 (60人：28.7%)	茶色系 (43人：20.6%)	白 色 (36人：17.2%)
靴	黒 色 (199人：35.0%)	茶色系 (190人：33.5%)	青色系 (47人：8.3%)
バ ッ グ	黒 色 (187人：36.0%)	茶色系 (140人：26.9%)	青色系 (52人：10.0%)

<上衣>

上衣「茶色系」は、2・3位の「青色系」「黒色」を引き離して1位であった。と言うのも、ベージュのコートを着用している人が多かったためである。今年の秋冬ファッションとして、「ベージュのコート」は雑誌などでもよく取り上げられていた。また、ベージュは流行色である、ないに関わらず秋冬の定番色（シーズンカラー）でもあり、どんな色にも合わせやすいということも1位になった理由と思われる。2位、3位はほぼ同じ着用率であるが、ここで言う「青

色系」は、ほとんどが紺色であり、やはり、上衣のコート類には紺や黒色といった無難な色が人気ようである。当年の秋冬提案色でもある「赤色系」は4位（75人：13.2%）で、3位の黒色とわずか4票差であり、流行色を意識していることが伺えるが、やはり上衣には流行色よりもシーズンカラーや無難で何にでも合わせやすい色を着用している人が多いと言えるだろう。

<インナー>

インナーの1位は黒色であるが、同じ1位であっても他のアイテムと比べると、その割合は17%と低い。これは、インナーには人それぞれによって様々な色が着用されているために1位と言えども低い値を示したからである。つまり、このインナーは各人の個性が現れる部位と言えるのではなかろうか。そのことを加味しつつも、当時の流行は、黒色のボーダーのオフタートルと赤色のニットであることを考慮すると、まさに流行を意識していると言える。3位に「白色」が入った理由としては、何色にも合わせられる定番色であることが挙げられる。

<下衣>

1位の「青色系」はジーンズを着用している人が圧倒的に多かったためである。ジーンズは季節に関係なく着用されており、また当年はジーンズが特に流行したためである。2位、3位は流行色というよりも合わせやすい無難な定番色を着用していたと思われる。

<靴下>

靴下には、流行色を取り入れていると言うよりも、何色にも合わせやすい無難色を着用していたと見る方が自然であろう。

<靴>

靴も靴下と同様に、何色にも合わせやすい無難な色が上位を占めた。3位は「青色系」であるが、紺色のスニーカーが多かったためである。

<バッグ>

バッグはおおむね靴と同系色で揃えられていることが分かった。つまり、「黒色」「茶色系」「青色」と無難な色が使われていた。

以上、アイテムごとに着用色を見た結果、特にインナーに流行色が取り入れられていることがわかった。一番目立つ上衣に流行色が取り入れられるのではないかと考えたが、秋冬は上衣にコートを着用している人が多く、やはりコートといえば流行色というよりも、シーズンカラー、定番色である「茶色」「紺色」「黒色」が人気であった。また、靴下、靴およびバッグは、茶色と黒色で過半数を占めることがわかった。

3. 4. 年代別の着用色

上記では全体的な結果を見たが、ここでは年代ごとに上衣、インナー、下衣の3アイテムに着目し、さらに詳細に見ることにする。

図6は、年代ごとに上衣、インナー、下衣に着用された各色の総数を全色総数で割った比率で表したもので、まずこの図から全体像を捉えることにする。青色系の着用率に注目すると、

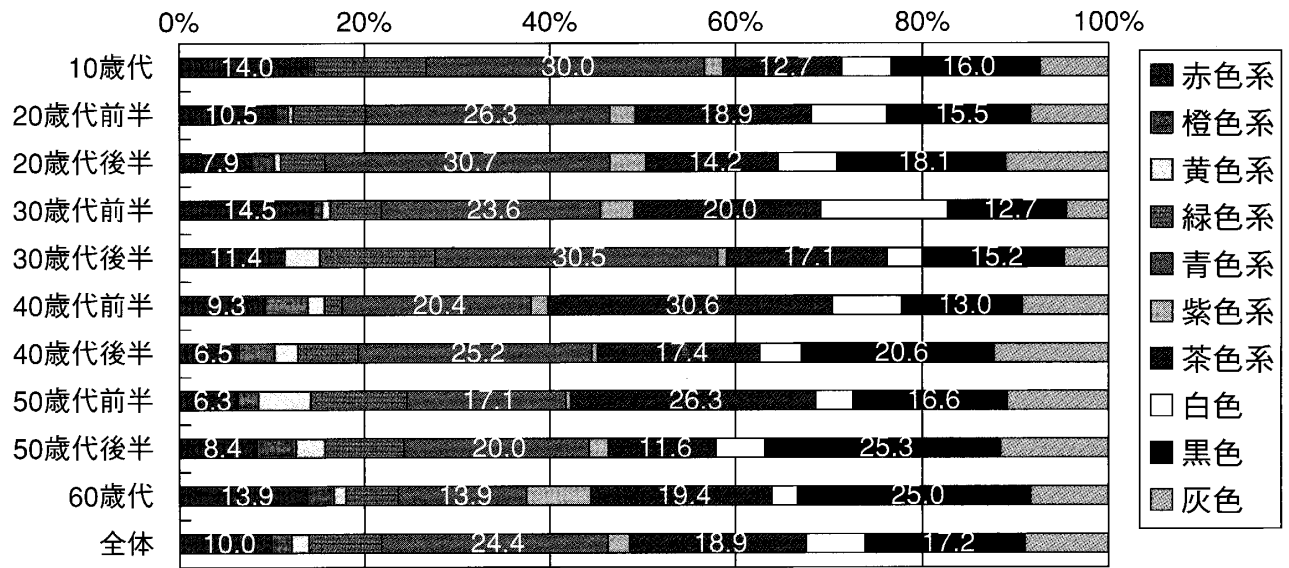


図6 年代別着用色（上衣+インナー+下衣）

年代が増すにつれて、上がったたり下がったりしながらも徐々に減少しているのがわかる。しかも上がり下がり注目すると、各年代とも後半の方が前半より高い着用率となっている。同様に黒色では、年代が増すにつれて、着用率が徐々に上がっているが、各年代ごとにみると、後半の方が前半より高い比率を示している。一方、茶色では、40代前半をピークに両肩下がりになっているが、各年代では前半の方が後半より高い着用率となっている。各年代全体（最下段）で4位の赤色は10代、30代前半および60代にピークがあるが年代ごとの傾向はないようである。

各アイテムごとに黒色、青色系、茶色系、赤色系に注目して見ていくと以下ようになる。

図7は上衣の年代別着用色を表したものである。茶色系は、40代前半が極端に着用率が高い(38.6%)が、それ以外の年代ではほぼ同程度の着用率(18%前後)である。図6の40代前半が高率なのは、この上衣のためである。青色系は年代に関係なく15%の着用率である。赤色系は10代と30代前半・後半および60代が20%の高い着用率であるが、それ以外の年代は低い値である。黒色は20代から50代の各後半の着用率が高い。

図8のインナーにおいては、赤色系は他のアイテムに比べて、このインナーでの登場率が高いが、年代による傾向は見られない。青色系については、10代および30代後半～40代の着用率が高い。黒色は、やはりここでも各年代とも後半の方の着用率が高い。一方、茶色系は黒色とは逆で、40代は異なるが、他の年代では前半の方の着用率が高い。40代前半は上衣に茶色系を使うためインナーの着用率が小さいのは当然と言える。さらにインナーでは他のアイテムに比べ白色の着用率が高いが、白色の場合、20～40代でみると、各年代の前半の方が着用率が高い。

図9の下衣では、赤色系は30代前半および60代で10%程度の着用率が見られるが、下衣として赤色系はほぼ使われないうってよい。赤色系について各アイテムごとに着用率を追っていくと、赤色系を着用するならば、ほとんどの年代ではインナーに取り入れている率が高い。30代前半・後半のみが上衣への着用率が高いのは興味深いところである。この下衣については、青色系、茶色系、黒色の3色で8割以上を占め、ほぼこの3色が下衣の定番色と言ってよいことになる。各色を年代ごとに見ると、青色系は年代が増すとともに上がり下がりしながら徐々に下がっており、逆に黒色、茶色系は年代が増すとともに上がり下がりしながら徐々に上がっていることがわかる。注目すべきは、青色が各年代とも後半の方が前半より高い着用率になって

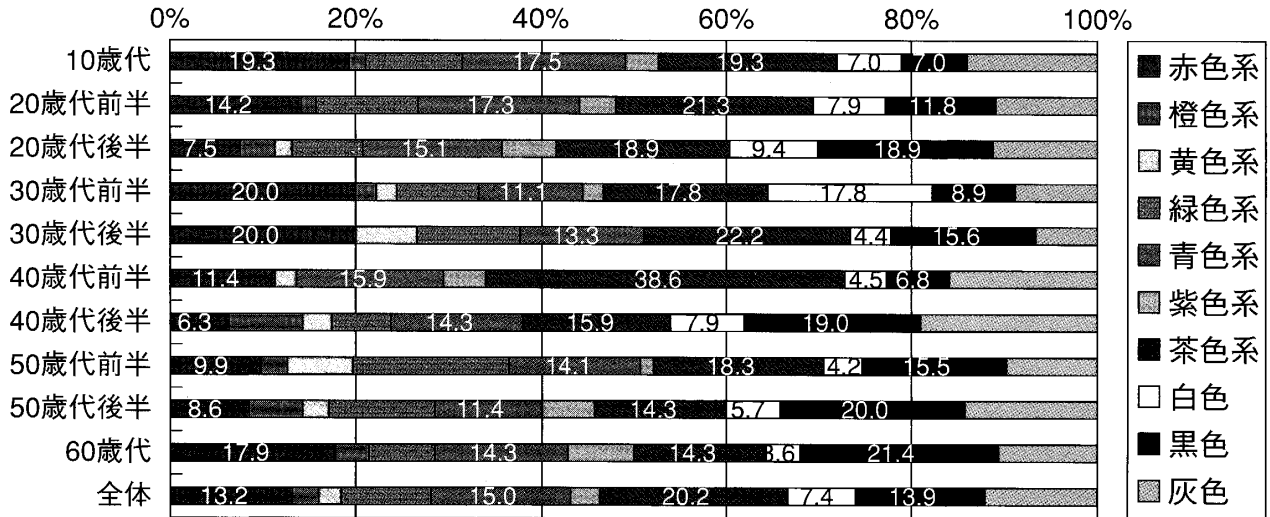


図7 上衣の着用色

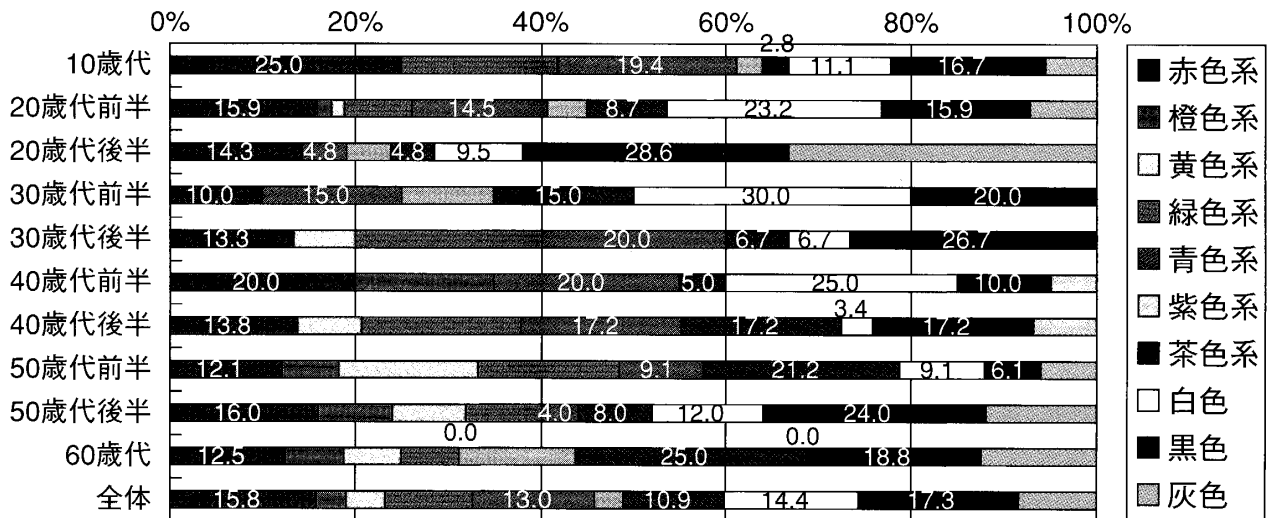


図8 インナーの着用色

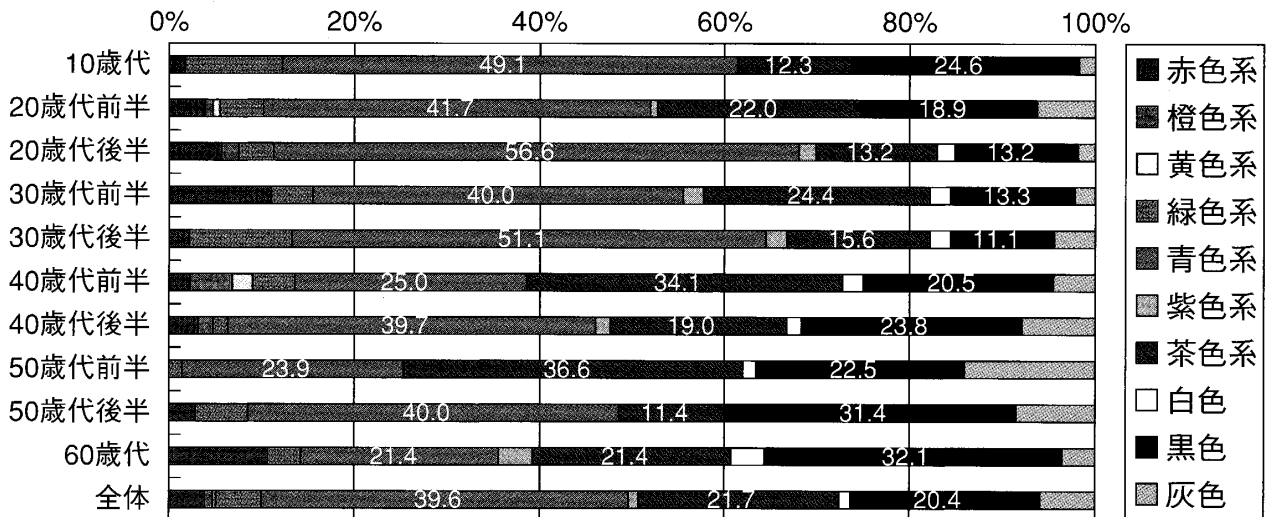


図9 下衣の着用色

いることである。逆に茶色系は各年代の前半の着用率が高い。

3. 5. 流行色を知るか否かが及ぼす影響

アンケートで、当時（2001年秋冬）の流行色を知っているか、知っているとしたら、その手段は何かについても調査しており、その結果を年代別にグラフに示した（図10）。

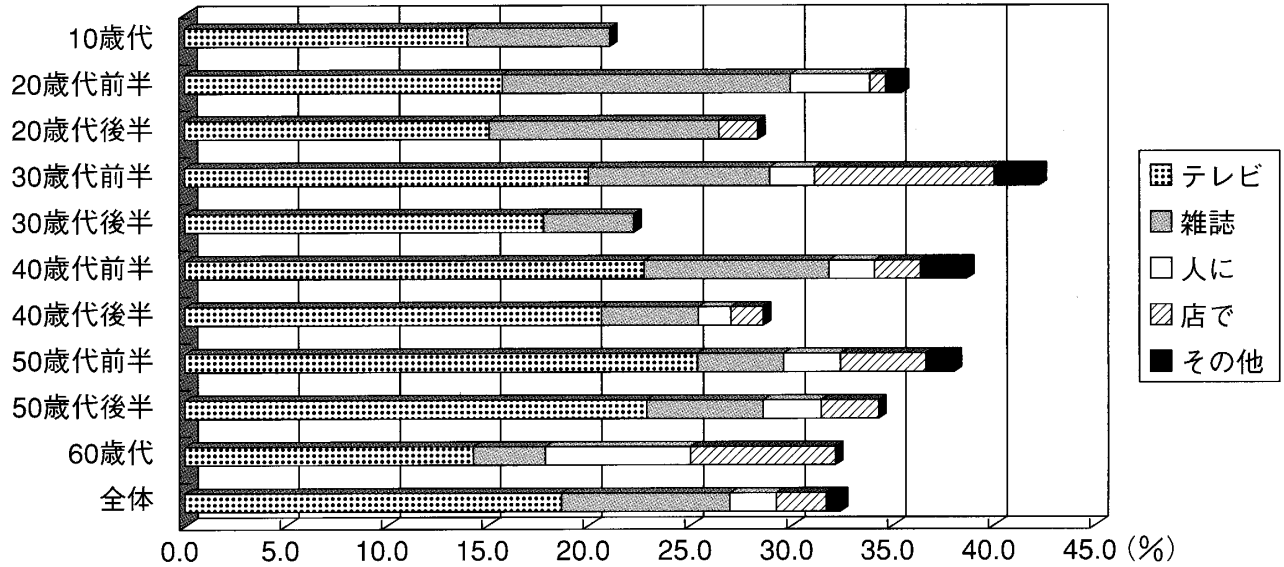


図10 年代別の流行色を知っている率

これによると、一番感性多感と思われる10代の知っている率が意外に少ない（21.1%）ことがわかった。20代以降を見ると、3割を超えている年代は、20代前半、30代前半、40歳代前半、50歳代前半、50歳代後半、60歳代と挙げられる。なかでも、30代前半は、4割を超える。この年代の特徴は、上衣に赤色系を着用する率が高かったことである。流行色を知った理由から言えるのは、家にいる時間の長さではないかと考えられる。全体で見ると、テレビが圧倒的に多く、その理由として、誰でもテレビから情報を簡単に得ることができるという点がある。メディアの中で、最も人々が活用している情報源であるといっても過言ではない。次いで雑誌が多いが、中でも30歳代前半までの年代に多く見られる。30歳代前半では、お店でのチェックも雑誌の割合と同程度の値が出ており、ショッピングの時に流行をチェックする人もいるようである。20歳代前半については、友人との会話の中で、ファッションや流行に関しての話題があると考えられる。10代についてはファッションに関心がないとは当然思われず、この結果はメディアによる情報にとらわれず、自分の感性を大切にしていると捉えるのが自然であろう。

ここで興味深いのは、各年代の前半が後半より知っている率が高かったことが挙げられるが、この理由については今回の調査から論ずることはできない。

流行色を知っているか否かで嗜好色や着用色に何らかの違いがあるかを調べた。図11は流行色を知っているか知らないか別に嗜好色を表したものである。ここで言えることは、青色系についてであり、知っている、知らないに関わらず、上位3位までに入る好まれた色であるが、流行色を知らない人の方が好む率がかかなり高いことである。図12には着用率への影響を示したものであるが、下衣を見ると流行色を知らない人の方が青色系の着用率が明らかに高いようである。また、茶色系を見ると3つのアイテムとも流行色を知っている人の方が高い着用率を示

している。このことが、インナー、下衣の各年代の前半、後半の着用率の違いとして現れている可能性があると考えられるが、これだけで結論づけることは当然できない。黒色も、流行色を知っている人の方が3つアイテムとも若干着用率は高いようである。赤色は、流行色を知っている人の方が上衣よりもインナーに着用する率が高い結果となった。

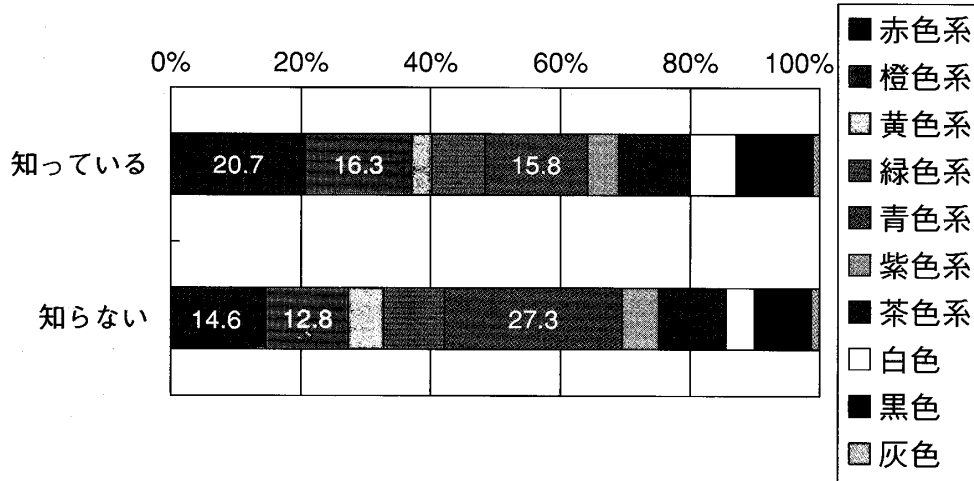


図11 流行色の知・不知別嗜好色

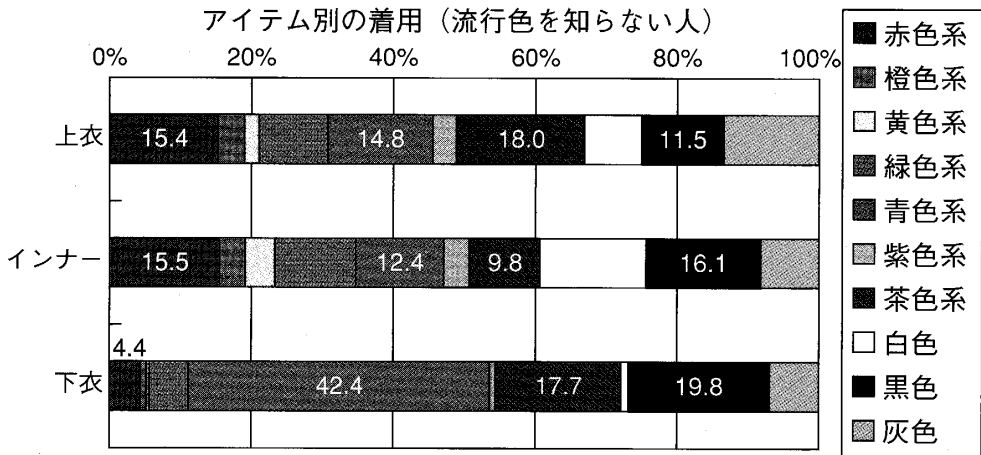
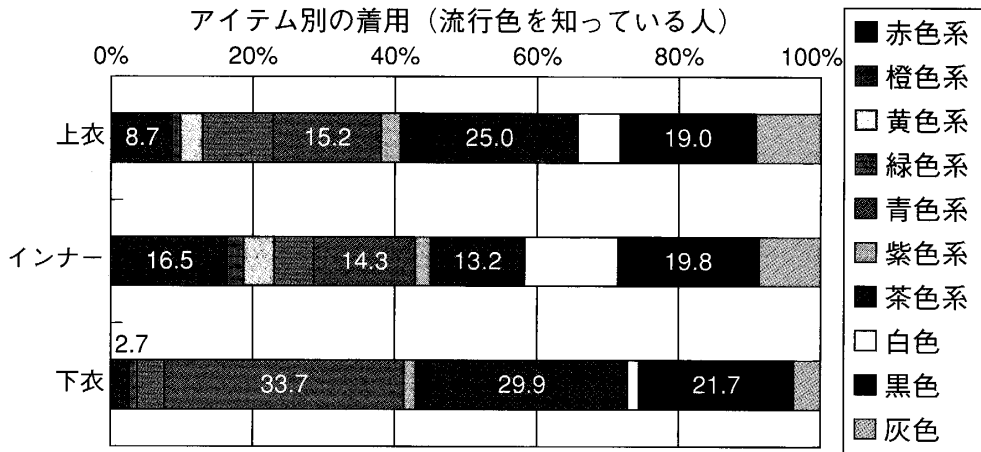


図12 アイテム別の着用率

3. 6. 衣料販売店への聞き取り調査

実際にどのような色が売れているのかを衣料販売店で聞き取り調査を行った。場所は、山口市 JR 山口駅及び防府市 JR 防府駅周辺にある各ブランド店23店舗と、比較対照として北九州市小倉北区の JR 小倉駅周辺の各ブランド店（27店舗）である。図13は様々なアイテムを通じてよく売れる色を答えてもらった結果である。各地域を100%として売れる色の%を示してある。山口・防府地区と小倉地区では人口比率からみて利用客数にかなりの落差があると思われるので、この結果のみで結論づけることはできないが、あくまで参考としてみると、山口・防府地区はメディアで大きく取り上げられた茶色系、黒、赤色系を購入しているようで、一方、小倉地区ではこれら3色以外にもその当時流行ると提案されたカーキ色（緑色系）、からし色（黄色系）、灰色もよく売れたそうである。

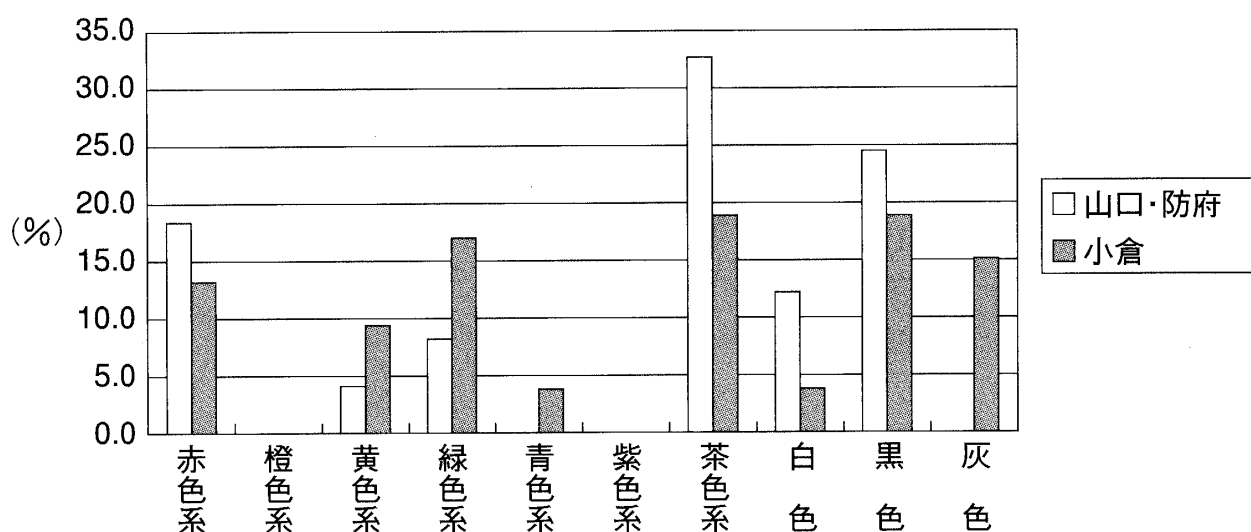


図13 店でよく売れている色

4. まとめ

今日、色彩に関する情報が様々は手段で得られるようになり、色彩は私たちの生活に欠くことのできないものである。中でも生活していく上で必要な衣・食・住のうち、衣に焦点を当て、嗜好色および着用色について調査した。

個々の色にはイメージがあり、人々は色自体に対する好き嫌いだけでなく、色のもつイメージに大きく影響されている。カラーイメージは色を選ぶ際、好きか嫌いかという判断だけではなく、自分の年代にあった色かどうかの判断をするときにも、無意識のうちに影響を及ぼしている。また、地域ごとのイメージカラーもあり、山口県では夏みかんの色がそれにあたり、県道のガードレールや県代表のスポーツチームのユニホームなどに用いられている。今回の嗜好色調査で橙色系が上位に挙げられる理由に関係しているかもしれない。年代別によるカラーイメージの相違を見ると、大人の場合、色の捉え方に大きな差はないといわれている⁶⁾。加齢したとしてもイメージの骨格部分の変化は少なく、その加齢によるカラーイメージの変化は、すでに形成されているイメージのニュアンスを深めたり、広げたりする方向に働くのみである。つまり、ヤングと呼ばれる年代とアダルトと呼ばれる年代とに大きな差は見られないが、自己の年代に見合った色がすでに人々の心の中に決められているということから、嗜好色や持って

いる服の色の答え方、実際の着用色に違いが生じるのである。

アンケートによる調査では、年代別による嗜好色と持っている服の色を調べた。その結果、好きな色ではどの人にも好まれる青色系が上位で、30代後半までは当時の流行色でもある赤色系も挙げられている。30代後半からは茶色系が上位を占めるようになり、自分の年代に見合った色を嗜好色においても選ぶという社会的規範意識が働いていると考えられる。持っている服の色では、実際には様々な色を持っていると思われるが、調査時期が10月であったことから、秋冬ものに限定して質問したこともあり、どの年代も茶色系と黒色が意識に上がったと思われる。これは、秋冬の定番色（シーズンカラー）である茶色系、当時は流行色として提案されていたが、通年の定番色ともなっている黒色という理由からである。このことから一過性の流行色ではなく、毎年着用することのできる定番色やシーズンカラーを多く持っていることが伺える。

また、嗜好色は流行色の知・不知によっても影響を受けるようで、流行色を知らない人は圧倒的に青色系を選ぶ。流行色を知っている人は、当時流行るとマスメディア等と言われた赤色系を、若干ではあるが好む傾向がある。本文では触れなかったが、流行色の知・不知による持っている服の色への影響は、今回のような調査方法では見出せなかった。他県と比較してないので結論づけることはできないが、流行色を知る率が3割程度というのは、低いのではないだろうか。

着用色の調査結果では、上衣はシーズンカラーの茶色系、インナーでは、ベーシックカラーの黒色および白色、準基本色の赤色系を着用している人が多く、このうち黒と赤は当時の流行色であり、どの色とも合わせやすかったり、流行を楽しむ傾向がインナーに見られた。下衣では、圧倒的にジーンズが多く、これは当時の秋冬ファッションでジーンズが流行したためである。

最後に、実際に衣料品販売店でよく買われる色を調査した結果は、北九州市小倉の店と比べると、山口では主にメディアで提示されている色を中心に購入しているようである。

今後の課題として、県外でも同様の調査を行い、他県と山口県との違いを明確にしたいと考えている。

この調査の分析は、平成15年度教育学部研究支援経費を受けて行ったものである。

参考文献

- 1) たとえば、<http://www.jafca.org/organ.htm>
- 2) 近江源太郎, 柳瀬徹夫, 椿文雄: 日本人の色彩嗜好(1), 色彩研究, Vol.25, No. 1, pp.2-13 (1978)
- 3) 近江源太郎, 柳瀬徹夫, 椿文雄: 日本人の色彩嗜好(3), 色彩研究, Vol.27, No. 2, pp.2-13 (1980)
- 4) 近江源太郎, 柳瀬徹夫, 椿文雄: 日本人の色彩嗜好(4), 色彩研究, Vol.28, No. 2, pp.2-9 (1981)
- 5) 近江源太郎, 柳瀬徹夫, 椿文雄: 日本人の色彩嗜好(5), 色彩研究, Vol.30, No. 2, pp.2-16 (1983)
- 6) たとえば、日本流行色協会編「色のイメージ事典」, 同朋舎出版 (1991)